

静岡新聞 2024年1月17日付

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

日本の新幹線建設プロジェクトの現地状況を見るため、インドに出かけてきた。場所はインドの西海岸沿いでムンバイからアーメダバードに至る路線である。日本の大型円借款のプロジェクトで、建設や運営にJR東日本が関わっている。

ムンバイはインド第2の都市であり、金融や商業の中心都市である。アーメダバードはインドで人口第6位の都市であるが、それでも600万人を超える人口である。ちなみにアーメダバードのあるグジャラート州は、インド建国の父のマハトマ・ガンジーの故郷であり、現在のモディ首相の生まれ故郷でもある。世界最大の人口を誇るインドであるので、この新幹線の沿線には多くの人が住んでいる。例えば、インド8番目の人口450万人のストラトは、

インド成長 新幹線で支援

ダイヤモンドの加工貿易では世界的に有名な存在である。沿線上のいくつかの都市を訪れ、巨大人口のインドの熱気を強く感じた。

インドの街の賑わいは、10年から20年前の中国の賑わいを思い起こさせる。アーメダバードなどの大都市では、メトロ(都市鉄道)や高速道路のインフラ工事が活発に行われている。そうした交通の結節点となる地域には巨大な都市開発が行われており、ビルの建設ラッシュが進んでいる。モディ首相はインフラ投資を楨子にした経済発展を打ち出しているが、インドの街の活気はこの国の将来に大きな期待を持たせるものである。

人口こそ中国に匹敵する規模であったが、これまでインドは中国の影に隠れて見えにくい存在であった。ただ、地政学的な問題が大きくなる中で、日本・米国・欧州などの国々は中国との距離を置かざるを得なくなっている。そうした中でインドの存在がますます大きくなっているのだ。インフラ整備を楨子としたインドの経済成長は、回国での需要の大幅な拡大を期待させる。

ただ、残念なことに、インドの街を歩いてみると、日本

企業の存在感があまり感じられない。自動車ではスズキ自動車が開発するマルチ・スズキが大きなシェアを維持して存在感を誇示しているが、それ以外の自動車や家電製品もあるいは一般消費財で日本のブランドを見かけることが少ない。地元のスーパーに入ってみても、日本のブランドの商品はほとんど見かけなかった。これは中国や東南アジアの光景とは大きく異なる。

話を鉄道に戻そう。新幹線や都市鉄道のプロジェクトで、日本は積極的に関与を続けている。新興国の鉄道プロジェクトで積極的に動いてきた中国がインドとは政治的に微妙な関係にあることも、日本がインドで主導的な動きをすることを可能にしている。これは日本とインドの関係を深めていく上では大きな意味を持つはずである。日本の新幹線やメトロが多くのインド人を乗せて走る光景を想像してほしい。日本がそうであったように、鉄道は一国の経済成長に大きな貢献をする。新幹線はインドの経済成長の象徴的な存在になるはずだ。その成長に日本が深く関わることの意義は深い。読者の皆さんにも、この経済支援プロジェクトに関心を持っていただきたい。